



第33代アメリカ大統領 H.S. トルーマン



第32代アメリカ大統領 F.D. ルーズベルト



終戦時のアメリカ国務長官 J.F. バーンズ

# 原爆投下の首謀者はだれか

## 「J.F. バーンズとルーズベルトの確執」

### トルーマンとの共謀

連載第3回

ヤルタ会談とルーズベルトの急死／新大統領の誕生

稲垣直

14 ヤルタ会談

バーンズを含む大統領一行は巡洋艦クインシー号で大西洋、地中海を経由して黒海のヤルタに向かった。ヤルタは黒海に突き出したソビエト領クリミア半島の温暖な保養地である。

八日間の船旅の間、ルーズベルトの体調は優れなかった。ポリオに冒され長年下半身は不自由であった上に、持病の心臓肥大症と脳障害にも悩まされていた。さらに悪いことに船中で風邪をこじらせてしまった。

そのためであろうか、船旅の間、会談に先駆け

て関係者と打ち合わせすることはなかった。本来なら、代表団全員で作戦会議を開き、英知を集めて交渉の準備をするのが当然である。ステイニウス国務長官が省内の官僚たちに用意させた分厚い「ヤルタ・ブリーフィング・ブック」にも、FDRはほとんど目を通すことはなかった。準備不足の不安を伴ったヤルタ上陸だった。

#### ●会談始まる

一九四五年二月四日、このヤルタで、ルーズベルト大統領、チャーチル首相、そしてスターリン大元帥の三巨頭会談が行われた。この会談こそ、七カ月の広島・長崎への原爆投下のまさに伏線となった首脳会談だった。

午後六時、ヤルタ会談は始まった。オープニングは全体会議の場で、終末に向かいつつある対独戦での各国の戦況報告から始められた。

赤軍は、ベルリンへあと60キロと迫っていた。相変わらず一日当たり一万人近い兵の犠牲者を出しながら、しゃにむに前進していた。この時点ですでにソ連軍はジューコフ將軍を中心に最後のベルリン攻略戦の準備に入っていた。

一方、米英軍は「バルジの戦い」で後退するなど苦戦を強いられながらも、戦死傷者を最小限にとどめつつ、アイゼンハワー將軍の指揮下に西から東に向けてベルリンに向かっていった。

※写真はすべてインターネット画像から

※ FDR ルーズベルトの略称  
フランクリン・デラノ・ルーズベルト

ベルリンに迫った赤軍の進軍下は、スターリンの鼻息は荒く、この軍事的な勢いの差がルーズベルトの体調とともにそのまま会議に反映されることになった。

会議の最重要議題は、ドイツの戦後処理だったが、それ以外にも重要な議題が三つあった。

第一はポーランド問題、第二はソ連の対日戦参戦、第三は戦後の世界平和機構「国際連合」へのソ連の参加である。それ以外にも東欧諸国、バルカン諸国、そしてギリシャの問題があった。

最重要議題であるドイツの戦後処理は、問題が出積みしていた。各国によるドイツの分割統治はひとまずの基本合意を得、東をソ連が、西をアメリカ、イギリス、フランスが統治することになったが、ベルリンも西と東に分割統治されることになり、禍根をのちに残す結果となった。戦争賠償の取り決めと徴収、再び軍事大国にならないための産業解体、ナチス戦犯の処罰などは、軍民合わせて死者一八〇〇万人にのぼる犠牲者を根拠にした貪欲強引なスターリンの要求と、やや寛容な処置を主張する西側の間の大きな隔たりが衝突して、次回に持ち越されることになった。

ポーランド問題も紛糾した。領土のソ連への割譲問題に加え、政権の問題も主張がぶつかり合った。赤軍の実行支配からその傀儡政権を主張するスターリンと、ナチスに追

われて西側に出た亡命政府の復帰を主張するチャーチルの対立が激しくなり、妥協点を見出せなかった。

ソ連の対日戦参戦も議論された。かねてからルーズベルトはソ連の対日戦への参戦をスターリンに要請していた。スターリンにすればすでに勝敗は決している極東に領土・権益を広げる絶好のチャンスだった。参戦の見返りとしてスターリンは極東の領土および権益を最大限要求した。

その一つは、南樺太返還と千島列島のロシアへの領有である。また、満州鉄道などの中国との合弁経営、遼東半島にある大連港の優先使用権、旅順港のソ連軍への使用権付与を加えた。

ルーズベルトはこれらの要求をすべて受け入れ、ソ連の参戦を促した。この約束のもとにスターリンは「ドイツ降伏後三ヶ月以内に対日戦に参戦する」ことを密約した。

また、ルーズベルトにとっては大統領職最後の置き土産として世界平和機構の国際連合の創設があった。どうしてもソ連を参加させたかった。ソ連の参加なくしては意味がない。そのため、ソ連を常任理事国に入れるとともに、国際連合での決議方式に常任理事国の拒否権を組込む大きな妥協でソ連に参加を約束させた。

会議の間もFDRの体調はよくなかった。

このため会議の直前の打ち合わせはなく、いきなり本番を迎えた。さらに毎日の会議に、誰を出席させるのかも事

前にはつきりさせなかった。会議の直前になって大統領に促して、やっと出席者が決まるという始末であった。

大統領がそうであるなら、國務長官があらかじめ議事日程と出席者の調整をするのが常識であろう。だが、FDRは日頃から國務省のスタッフを信用せず、頼りにしていなかった。大統領から指示もなく、國務長官は動けなかった。

このような準備不足が災いし、またスターリンの勢いに押されて会議はソビエトのペースで進められた。国際連合の創設を除いてすべてはソ連の要求のオンパレードだった。おおよそ、FDRのリーダーシップは見られず、ロシアに押し

スクワを訪れてのスターリンとの会談を通してスターリンの共産主義支配の厳しい現実を一鉄のカートンとして実感していた。ソ連支配の東欧諸国の実態を熟知し、ソ連共産主義の拡大と野望に大きな懸念を抱いていた。

ポーランド政権の樹立についても、ソ連は帰国した亡命政権等の民主勢力を投獄・虐殺するなどして潰し、共産主義傀儡政権を固めてしまった。口では総選挙と言いつつ実際には民主勢力を圧殺するソ連の冷酷なやり方を見抜いていた。

また、降伏後のドイツに関わるソビエトの要求が、あま

しまくられていた。会議でのルーズベルトの言動は、ロシアへの融和と譲歩の姿勢の連続のように見えた。生来の楽天的な人柄、そのうえ体調が優れないための投げやりが洵い交ぜになっているように映った。

●チャーチルの不満と懸念

この有様に、一番気をもんだのはチャーチルだ。

チャーチルは、ルーズベルトの対ソ政策が宥和的で譲歩し過ぎることに不満を抱いた。

もともとチャーチルは、それ以前にモ



ヤルタ会談での三巨頭

りに過大で、ほとんど略奪とも言える強欲さが、ドイツ国民の負担になり、戦後のヨーロッパにさらに大きなスターリンの野望を広げさせるきっかけになると恐れを抱いた。

さらに、米英ソによる戦後の占領地域の分割においても、東ドイツをはじめ、オーストリア、ハンガリー、ルーマニアなど穀倉地帯を全面的にソビエトの占領に委ねるような譲歩には反対した。それは西側の占領する地域や西ヨーロッパ全域の食糧不足を招き、飢饉・疫病のリスクすら予測されると考えたからだ。

チャーチルは、ソ連に自由にさせてはならないと思いつつ、しかしバルカン諸国のルーマニア、ブルガリア、ハンガリーについては、既成事実として赤軍にその管理を預けてしまったために、なす術がなかった。「自由選挙のもとに民主主義政権を」と叫んでみても、空念仏であった。わずかにギリシャを死守するにとどまった。

会議の結果とFDRに大きな不満と懸念を残しつつ、チャーチルはヤルタを去らねばならなかった。

### ●ヤルタでのバーンズの立場と役割

この間、バーンズは何をしていたのか？

大統領から頼まれてヤルタまでやって来たバーンズは、そこで、休、何をしていたのであるのか？ ヤルタ会談に参加したものの、バーンズへの処遇はさんざんだった。

初日の全体会議の開始早々、バーンズにとって腹が立つ事件が起きた。当初バーンズも出席が予定されていると聞かされて、彼は会場の外で声が掛かるのを待っていた。ところが、いつまでたっても席への案内がなかった。長時間待ちぼうけを食らい、それにしびれを切らした彼は会場に入るうとしたところ、警備のロシア将兵から入場を阻止された。バーンズは怒り心頭に発し「俺は、すぐにも帰国するぞ」と叫んだ。

そして、会議の後に予定されていた大統領主催の晩餐会に「出席しない」と息巻いて、怒りをぶちまけた。

議会やプレスに対し、得意の口先で脚色し説明したのだ。

ヤルタ会談は報道関係者を完全にシャットアウトして行われたので、プレスからは終戦後のドイツの扱いについて鋭い質問が飛んできたが、彼は曖昧に言葉を濁した。FDRの意向で知らされていなかった、肝心の賠償問題と産業解体、まして極東に関する密約などは、まったく触れられることはなかった。バーンズが提供した情報には、五里霧中のバーンズの個人的で不正確な内容が追加されていた。ただ、ステイニウス國務長官が氣を利かして、行きの船中で渡してくれた「ヤルタ・フリーフィンク・ブック」に彼は目を通していたので、合意内容は別として、ヤルタでおよそ何が討議されたかは推測できた。

バーンズの早めの帰国と、肝心の議事・合意内容のない帰国会見は、実は、FDRの作為でそうだったのだ。大統領は、アメリカにとって不利な合意事項については、隠蔽しようとしていた。だから、不都合なことはバーンズにも内緒にしておいたのだ。

なお、FDRを初め取り巻きの幹部らは、外遊の後、一か月後にワシントンに帰っている。

バーンズはヤルタ会談への参加とFDRにはほとんど失望し、ワシントンに戻って来たのだった。

### 15 バーンズ、ワシントンを去る

バーンズは、一九四五年四月七日に戦時動員局局長を辞

職を聞きつけたホステス役のFDRの娘アナ・エレノア（母親と同名）のとりなしで、やっと晩餐会に出席した。FDRが、体調が悪いとはいえず、バーンズをいかに軽く扱っていたかを見せつける場面でもあった。

何度かルーズベルトの指示により、チャーチル、スターリンらとの食事会に同席し、巨頭たちと一言、二言、言葉を交わす機会があった。しかし、彼らと何かを議論することはおろか、重要議題についての討議の場にも同席させてもらえなかった。FDRからは助言を求められることもなかった。ドイツへの賠償・産業解体問題が議論された重要な場にはいなかった。日本、朝鮮半島、および中国についての領土と権益に関する密約が交わされた会議の時は、バーンズはすでにヤルタを離れていた。彼は、まるで狐につままれて母国に帰っている。

バーンズの帰国後の任務は、米・英・ソ間で形ばかりの合意を見た「ヨーロッパ解放共同宣言」をプレスに売り込み、上下院の要人に対し説明することであった。ロシア人の意向で、作爲的に抽象化された「ヨーロッパ解放共同宣言」と「世界平和の実現を目指した国連機構に関する合意」などといった、当たり障りのない内容の共同コミニケの紙が、先に帰国したバーンズの手元に届いていた。

その発表用の声明文をもとに、FDRのリーダーシップのもと、さも実りある合意がなされたように、バーンズはしてワシントンを離れ、故郷のスパータンバーグに帰った。ルーズベルト死去のわずか五日前のことであった。

その真の理由は、FDRとの長い関わり合いに嫌気がさし、終止符を打ちたかったのだ。政治から身を引きたいと思ったのではなく、フランクと決別したかったのが真相である。

振り返ってみると、FDRとの交流は一九二二年から始まって、実に三一年を超える。その間、一九三七年までは、二人の仲は順調のものであった。バーンズは、フランクの大統領担ぎ出しに精一杯応援した。ニューデイルではFDRの要望に応じて、法案をありとあらゆる策をめぐらして通したのだ。

そうした、偉大な政治家フランクリン・D・ルーズベルトを支え続けたお蔭で、ジミー・バーンズも、世間から高く評価されてきた。

しかし、一九三八年頃、南部保守派民主党議員の追い出しを謀る「ルーズベルト・バージ」が始まった前後から、リベラル派のFDRと保守派議員のリーダーであったバーンズは、政策面で対立するようになった。実際、FDRの実行しようとするリベラル志向の政策には、南部出のバーンズは同意するわけにはいかなかった。とりわけ人権や労働に関連する法律について、対立は際立っていた。

二人の関係を決定的に悪化させたのは、四二年と四四年

の民主党シカゴ大会における副大統領指名を巡る仕打ちであった。ルーズベルトは、二度ともバーンズに慮えてやらなかった。

ヤルタでも大統領から、思い出すのも恥ずかしい役回り  
を仰せつかった。FDRの扱いは、まるで子供の使い走り  
であり、バーンズにとっては無礼千万なあしらいであった。  
彼の回顧録の中では、FDRをあからさまに非難していな  
い。世間の圧倒的な支持を受け、高く評価されているFDR  
を批判することは、かえって自分の評価を傷つけてしま  
うと、バーンズは用心していたからだ。

だが、実際、バーンズは長年尽くしてきたルーズベルト  
から立て続けに酷い仕打ちを受けたことで、やる気を失く  
してしまっていたのだ。フランクからの痛打は、やはり、  
昨年夏の副大統領選であったのは間違いない。長い間のF  
DRへの忠誠と協力が、見事に裏切られたのだ。ジミーに  
はそう思えたし、周りからもそう思われたのは間違いない。  
こうした度重なるFDRの仕打ちが、大統領の死後、そ  
の外交政策、とりわけ、対ソ・対独政策を、バーンズが  
一八〇度変えてしまおうとの思いに至った契機になった。

そして、この政策の転換を実現させるために、手段とし  
て原爆の威力を利用する。それが、日本への原爆の使用決  
断のトリガーとなったのだ。そして、ルーズベルトが想像  
だにしなかったであろう、アメリカ対ソ連の冷戦時代へと

突き進んでいった。

## 第二部 バーンズ原爆へ走る

第一部完

### 16 巨星 墜ちる

一九四五年四月七日、大統領の引き留めにもかかわらず、  
ジミー・バーンズは中央政界を退いて、故郷サウスカロラ  
イナ州のスパータンバーグに戻った。

一週間も経たない一二日の夕刻、ジミーは、ブラウンの  
経営するローカル放送局の一室を借り、リタイヤの後始末  
をしていた。

その時であった。局のスタッフからルーズベルト大統領  
の訃報を聞いた。蜘蛛膜下出血である。アナウンサーは、  
確かに、突然の死と言った。だが、ジミーには、彼の死が  
突然とは思えなかった。大統領のこの日は、そう遠くない  
と予感していた。だから、昨年夏、彼も副大統領に立候  
補しようとしたのだ。(アメリカ大統領の不慮の死の場合、  
副大統領がそのまま大統領になり、任期まで務めることが  
法律で定められている)

ザ・グレート・ステーツマンの死を聞いて数分後、フォ  
レスタル海軍長官から電話があった。

「ワシントンにおいてになったほうがよいでしょう。今夜  
にでも飛行機を差し向けますから……」

のときもウォルターは慰めの言葉を失っていた。

その夏、副大統領に立候補したバーンズは、FDRの裏  
切り行為ともいえる仕打ちによって、手に入れると自信  
満々であった副大統領の椅子を無残にも弟分のトルーマン  
に奪われてしまった。そして今日、予期していた通りFDR  
は他界し、法の定めによってトルーマンが第三代の合  
衆国大統領になってしまった。

深夜、飛行機はワシントン軍用飛行場にスリップしなが  
ら降りた。春とはいえ夜気は冷え冷えとしていた。

### 17 誰もが驚き、不安を抱いた青天の霹靂

四月一二日、偉大な政治家ルーズベルト大統領は逝った。  
誰もが「そうならなければよいが——」と恐れていたこ  
とが起きたのだ。トルーマンは、副大統領ゆえに法の定め  
に従って、選挙や議会の洗礼を受けることもなく、大統領  
になってしまった。

連邦議会の議員や閣僚、官僚たちはもろろん、プレスも  
財界も、アメリカの一般国民までもが慌てふためいた。こ  
の国の先行きを案じて、不安に襲われた。ヨーロッパ戦線  
は終わりが見えてはいたが、太平洋戦争は未だ決着はつ  
いていない。戦争が終わっても、その後始末に、アメリカに  
とって教知れない未知の難題が降り掛かってくることは明  
らかであった。

そんな中で、FDRという巨人の後釜に政治経験も能力

その夜遅く、バーンズは長い間、友として秘書として働  
いてくれたウォルター・ブラウンと一緒に、出迎えの海軍  
長官機に乗ってワシントンに向かった。

二時間ばかりの飛行中、ウォルターは幾度か会話を交わ  
そうとした。ジミーの沈んだ気持ちを、ちよつとでも慰め  
たい心遣いからである。

だが、FDRの死については、

「フランクの長引いた病のせいだ——」と、ジミーは言っ  
ただけであった。

しばらく沈黙が続いて、ウォルターは、トルーマンのこ  
とに話題を変えてみた。

「ハリーに大統領が務まりますかね。名ばかりの副大統領  
でしたし……。戦時という国家の大事に、とてもやりきれ  
ると思えません。すぐにも貴方が國務長官として入閣し  
てサポートされなければ、持ちませんよ」

だが、ジミーは黙りこくったままだ。

飛行中、バーンズは暗闇に点々とする農家の光を見るで  
もなく目をやったり、面長の眉間に深いしわを寄せ、不機  
嫌な表情のまま眼を閉じたりしていた。友を亡くした悲し  
みと、行先を失った恨みが綱い交ぜになっている。

ジミーが、なぜこんなに不機嫌なのか察しはついている。  
ウォルターはふと思ひ起こした。昨年夏のシカゴ大会から  
の帰りの列車で見せた打ちひしがれたジミーの様子を。あ

もないミズーリの田舎者が大統領になった。何ということだ。巷では、「奴が務まるのなら、町の床屋のオヤジでも大統領になれるというものだ」とまで言われた。プレスも似たり寄ったりの、国の先行きを案ずる論調で溢れていた。

統合参謀本部議長で、FDRに続いてトルーマンの大統領特別補佐官を務めるリーヒ提督は、新大統領の誕生に皮肉たっぷりと言ったものだ。

「トルーマンと言う男は、一体どここの馬の骨だ？」

それどころか、誰よりもまして当のトルーマンが慌てふためいていた。彼は大統領退任後の五年に、「一九四五年、決断の年」という回顧録を出しているが、その中で触れている。もと農夫であった彼は、大統領就任の宣誓を済ませた直後、記者会見の場で素直に内心を吐露している。

「諸君、今もし私のために祈りを捧げてもらえぬなら、ぜひお願いしたい。皆さんは身体の上に干し草の積荷が落ちてきた経験がどうかは知らないが、昨日、突然、何が起きたか告げられた時、私は、月も星も、すべての惑星が私に向かつて落ちてきたように感じられた。未だかつてない、恐ろしく責任の重い仕事が私にのしかかってきたのだ」

### 18 影の國務長官誕生

#### ●情報収集

ブラウンは翌朝、キャピトルに行き、上院事務局長の

たい」とも言っていたな……」と。

ホテルに戻ったウォルターからこの話を聞いたジミーは、しばらく考えて、トルーマンに電話してその日の午後会う約束をした。

#### ●トルーマンの本音

新大統領トルーマンは、すべてのこと、とりわけ外交のことに相談に乗ってもらえる気心の知れた人物を傍らに置きたかった。と言うより、外交のすべてを任せられる國務長官が欲しかったのだ。なぜと言って、ハリーは大統領になった瞬間から外交に不安を感じたからだ。もともと性格的に自分に合っていないし、教養もない、知識も経験もかたつきしない。もちろん、人脈もないときている。そのことだけで、すぐにでも大統領の座から逃げ出したい気持ちであった。

自分を救ってくれるのは、ジミー・パインズをおいて、他になかった。だから、「外交はすべてジミーに任せてしまおう。そうすれば、彼が副大統領の指名のことで機嫌を損ねていたのも、直るにちがいない」と割り切っていた。

なかでも気掛かりなのは、ヤルタでの巨頭会議のことだ。ほんの二ヶ月前には、チャーチル首相、スターリン首相、そしてルーズベルト大統領という世界に冠たるステーツマンが、ヤルタに集まって会談を持った。

そこで何が話し合われたかを、新大統領である自分はまっ

ピッフルを訪ねた。

頼まれての情報収集ではなかったが、得意の聞き込みである。さすが、彼の記者で鍛えられた勘は鋭い。ピッフルの口から興味深い情報を聞き出せた。

「新大統領はさつそく、今の閣僚の中から無能な人間を追い出して、有能な人物に代えなければならぬでしょうね」と、ブラウンはまず、誘い水を掛けてみた。

すると、ピッフルは反応して、苦笑しながら立て続けにこう言った。

「そりゃあそうだ。いなくてもいい、役立たずの連中が政権内部にわんさかいる。知っての通り、FDRのご機嫌取りどもがね……。政権がタラタラ続くと、得てしてヘドロが溜まるもんだ。根こそぎ掻き出して、実力者に切り替えるべきだ。ひとり残らず全員だ」

彼は「ひとり残らず全員だ」のところに語気を強めた。大統領も差し替えるべきだと言外に言っているように思えて、ブラウンは思わず吹き出しそうになった。

ピッフルは間をおいてブラウンに小声でいた。

「それはそれとして、ハリーは、しきりと『ジミー・パインズの力を借りたい。すぐにでもワシントンに彼を呼び戻したい』と言っていたよ。」

「今、国際連合の設立で協議が重ねられているサンフランシスコ国際会議にも、さつそく彼を國務長官として派遣し

たく知らない。そのうえ自分自身で超大物に伍して丁々とやり合うことなど空恐ろしく、思っただけで震えを覚える。この先、大戦が終わり、また新たに行なわれるはずの巨頭会議の場で、ドイツや日本の戦後処理が幾度となく話し合われるであろうことは、素人のトルーマンにもわかっていった。だが、その土台となるヤルタ会談で話し合わせ、約束されたことをトルーマンはまったく知らなかった。これは合衆国大統領は務まらない。

パインズがヤルタ会談でFDRと終始同席していて、会談で何が起きていたのか知り尽くしているにちがいないと、トルーマンは思い込んでいた。その彼は、帰国後、大統領に代わって議員やプレス（メディア）に、会談で起きたことをあれこれと報告している。だから、「あの緻密な仕事師の兄貴なら、すべてを知っているであろう」と、新大統領が思ったのも無理はない。プレスの連中ですらそう考えていたのだから。

ともかく、外交を何から何までパインズに預けたい一心であった。不安に駆られた大統領は、すべてを彼に頼るしかなかった。

#### ●愚痴をこぼす新大統領ハリー・トルーマン

四月一三日の午後二時過ぎ、二人はホワイトハウスでFDRの死後、初めて顔を合わせた。トルーマンはパインズが姿を見せるのを待ちかねていた。彼は今まで通りに親し

げではあったが、バーンズに向かつてまるで憐れみを乞うように丁寧な言葉つきでこう言った。

「ジミー、助けて欲しい。私は今から何をすればよいのか、右も左もまったくわからない。迷える子羊だ。貴方の力を是非ともお借りしたい……」

その様子はなんとも落ち着きがなく、狼狽（おどろおどろ）えていた。

そして新大統領は、副大統領になった後のことを口早に一気に話した。

「大統領は、私の存在をまったく無視していた。日々のお来事やこの前のヤルタ会談のことも一切、情報を流してくれないし、閣議にも呼ばれないことが多かった。これをしてくれ、あれを処理しておいてくれ」と言われることもない。まして、政策や方針について私に相談を持ち掛けたり、彼の意見を説明してくれることもなかった」

ジミーは、無表情に、重々しく言った。

「よくあることさ。そのやり方はフランクがよくやる手だ。私もそんな扱いを度々受けたものだ。驚くにはあたるまい。そんな目に会ったのは君だけではない」

ちよつと間をおいて、自分の足元に目録をやりながら続けた。

「あの人は、民衆をそそのかすのは得意だが、部下をその気にさせて思いつき仕事に燃えさせることのできない人なんだ。飼犬を自分の部屋に入れても、一度も抱いてはくた。四月二十四日、ホワイトハウスの大広間、イースト・ルームで葬儀が行われた。短い時間ではあったが、前大統領を惜しむ心のこもったひとときであった。

その日の夕刻、大勢の一般国民の見送りの中、遺体はFDRの故郷ニューヨーク州ハイドパークへと向かった。大統領専用列車には、彼の向かいの席に約束どおりバーンズが腰掛けていた。

列車が動き出してしばらくして、トルーマンは朝から多忙のため目を通していなかったニューヨーク・タイムズの朝刊を開いて、評論家ロイ・ロバーツが書いた記事を、声を出して読みあげた。

「新内閣はバーンズを中核にすえて組織されるであろう。彼は、例えば国務長官の地位を含む、自分が望むいかなるポジションでも手に入れることができよう」

そして、上機嫌の笑い声をあげながら続けた。

「ジミー、ロイは貴方を国務長官に仕立てあげようとしているのさ。もつともなことだけど……」

バーンズは、苦笑いを浮かべながら黙って聞いていた。

その後、国連創設準備のためのサンフランシスコ会議のことに話題は移った。会議では、一月に国務長官になったばかりのステイニアスが議長を務め、国際連合の創立について各閣間で議論が重ねられていた。

にもかかわらず、ハリーはジミーに向かつて今すぐにも

やったことがないお人だ……」

ハリーはジミーからそう言われると、相槌を打って、せき込んだように続けた。

「貴方の言うとおりだ。合衆国の最高指導者としての心得なんぞ、これっぽっちも教えてくれなかった。副大統領に、どうして私を選んだのだろう」と、毎日、と思いついた。だから、いま突然大統領になってもどうすればよいかわからない。……ジミーは唯一最高の頼れる友だと思っている。これまでのよしみで、ぜひとも私を助けて欲しい」と嘆き、取りすがった。

この時の様子を、ウォルター・ブラウンは回想録に書いている。

「大統領とバーンズは二時間にわたって話していた。トルーマンはバーンズの指示を仰いでいるようだった。彼はバーンズを親友だと思っていると語り、他の誰よりも政治を知っているから、ぜひとも力を借りたいと言っていた」

トルーマンの不満と不安を聞いたバーンズは、彼を冷たく突き放す気にはなれなかった。頼られると無性に助けたくなるのだった。その場で、

「明日、葬儀の後、ハイドパークでの埋葬への行き帰りの列車に同乗して、これからのことを相談しよう」と約束した。

●「国務長官にぜひとも……」

国務長官になるよう薦めた。

「貴方を国務長官に指名したい。そして、ステイニアスに代わって会議を取り仕切って欲しい」と。

だが、バーンズは彼らしい深慮で、遮った。

「その考えは賢明ではない。ステイニアスは昨年十一月、ハルの後任の国務長官になって、ヤルタへも同行した。しかも、たったこの前、FDRから命ぜられてサンフランシスコ会議の議長になったばかりだ。彼なりに張り切って国連の創設に奔走している。もしそんなことをすれば、ステイニアスは落胆するだろう。それどころか、政界にひと波乱巻き起こすことになる。彼は知っての通り、GMの副社長やUSステイールの会長を務めた大物だ。経済界まで敵に回すことになりかねない。それに議会も黙ってはいないだろう」

翌日、ワシントンへの帰りの列車の中でも、二人はしきりと話し込んでいた。

次の日も、朝早く大統領は電話をしてきて、二人は再び会うことにした。

バーンズがホワイトハウスに着くや否や、トルーマンは息せき切って喋りだした。

「ジミー、国務長官の椅子を約束します。ただ、時期については貴方の意見を尊重し、考え直してみました。国連問題の見通しがつくまで待つてもらいたい。でも、つぎの巨

頭会議までには必ず貴方を國務長官に指名したい。それまでは、私の個人的な代理人として実質、國務長官同等の権限で外交問題について全面的に私に助言して欲しい。國務省の連中にも情報は必ず貴方に流すよう指示しておきます」

と、トルーマンは、バーンズに逃げられてはいけなれないと思つて、最大限の約束をした。

彼は大統領なのに、これまでの二人の関係から抜け切れないのか、丁寧語で喋ったり、ときに新しい立場にふさわしい言葉使いになった。シミールも、ハリーに向かつて今もって見貴のような口を利いていた。

バーンズは、ちよつと間をおいてこの提案を受け入れた。そして、なぜ自分がワシントンに去つて行つたかを明らかにした。

「ハリー、私が今月七日にワシントンを離れてサウスカロライナに引つ込んだのは、戦争の先行きも見えた今、私の役割は終わったと思つた。平常時の官僚として仕えることは望まなかったからだ。だから、フランクの引き留めもあったが、そうしたのさ」

突然、バーンズはリタイヤした表面きの理由を説明した。本音は打ち明けなかった。そして付け加えた。

「だが考え直してみると、私は何としてもヨーロッパに平和を取り戻したいと願っている。だから、終戦後の各国と

これは、「考に値する」というものだ。彼が最も苦手とする外交をそっくり肩代わりし、牛耳ることができるのであれば、俺の立場は大統領と変わりはしない。

それに、いままでは俺は本格的な外交に携わつたことはなかった。これからその経験を積むことができれば、オールラウンド・プレイヤーになれるというものだ。チャーチルやスターリンといった世界の超人物と対等に交渉するといふ、願つてもない機会も手に入る。ネゴシエーターとしてこんな幸せなことはない。

外交だけでなく、奴さんができないのなら、この俺が、実質、内政も支配することだってできる。

大統領のフランクが外交を仕切つていたとき、俺は内政をすべて支配してはいたではないか。ものは考えようだ。

それに、國務長官になつていけば、ハリーに何かあったときは大統領の椅子が転がりこむという寸法だ。「くるみは、腐るまで待て」と言うではないか。これは俺にとつて最後のチャンスだ」

そう腹の中でバーンズは考えていた。いかにも実利を重んじるプラグマティストらしい、受け止め方であった。彼は根っからの仕事師なのだ。

実際、その当時の國務長官は、今とは違って、国家安全保障を含む幅広い分野に権限を持っていた。だから、バーンズは國務長官のポジションに大いに魅力を感じていたの

の交渉を手掛けたという気持ちもある……。だから、ハリー、喜んで君の要望に応えたい」

こうして、バーンズは四五年四月一六日から國務長官に就任する同年七月三日までの間、トルーマンの私的代理人として、実質、外交問題を中心に大統領への助言者になった。影の國務長官が誕生したので。

●なぜ、影の國務長官を受けたのか、

その本音は……

ウォルター・ブラウンは、FDRがこの世を去つた後のバーンズのことについて、当時の日記にこう書いている。

「ハリーが大統領になつたことに、シミールは内心腹立たしく思つていたことは間違いない。なぜと言つて、はるかに格上の先輩議員でもあり、彼より圧倒的に能力と経験のある自分が大統領になれなかつたことに、悔しさを通り越して怒りを覚えていたのだ。『四四年の夏のシカゴ大会で、あのとき最有力とされていた自分が副大統領に選ばれてさえたならば、そんなに腹立たしい思いをすることもなかつたであろう。それもこれも、長年支えてきたフランクの裏切りのせいだ。今、事もあろうに、そのハリーのために尽くさなければならぬとは、なんと皮肉なことか……』と」

だがバーンズには、それはそれとして、別の打算があつた。

「ハリーが言うように外交をすべて任せてくれるのなら、だ。それに副大統領が空席の今、大統領に万一のことがあるれば、國務長官が大統領を継ぐ立場である。」

●初仕事

ハイドパークでのルーズベルトの埋葬も終わり、バーンズが自分を支えこくれる日処もついた大統領は、少しは落ち着きを見せていた。

トルーマンは、バーンズをホワイトハウスに呼んだ。ウォレス商務長官が立案した議会での大統領就任演説の原稿を見せながら、彼にその手直しを頼んだ。引き受けたバーンズは、ブラウンとコーエンに原稿の全面的な作り変えを命じた。

ブラウンは元が新聞記者だから、鋭敏な触手を持つており、巷でトルーマンがあれこれと取沙汰され、皮肉られてゐることを知つていた。だから、大統領がどんな調子の演説をすればよいか、わきまえていた。

コーエンは、ニューディールに関連する多くの法規の起草を手掛けた文筆家で、法律や政策に通じている。手堅い彼は、議員やプレス、そして国民が新大統領に何を期待し、何に不安を抱いているか十分に読めていた。戦時の今、力強い基調と傲が必要であることも呑み込んでいた。

バーンズは、ブラウンとコーエンによる合作の草案に仕上げの手を入れて、大統領に渡した。

こうしてできあがつた演説文は、前大統領の政策を全面

的に継承する主調となっていた。そうすることが、トルーマンというまったく未知の大統領への議員や国民の不安を私拭する方法として、とりあえず最も効果的であると、彼らは計算していた。

一六日の議会では、気掛かりな面持ちで新大統領を迎えた議員たちも、堅実で格調高いトルーマンの就任演説を聞いて安堵した。とりわけ「偉大なるフランクリン・デラノ・ルーズベルト前大統領の政策をそっくり継承する」と、胸を張って力強く読み上げた時は、議員全員が立ち上がり、賞賛の手拍子を叩いた。

また、対日姿勢はといえば、「われわれの要求は従来も今後も、無条件降伏であり、平和の破壊者とは一切の取引をしない」と押し切った。プレスや国民からも、この逞しい基調の演説は歓迎された。

バーンズの振付けを守って就任演説を無事切り抜けた大統領は、その世間の心地よい反応を確かめて、思った。「やっぱり、ジミーを頼りにしたのは間違いでなかった」

だが、その後の実際の政治の方向はと見ると、この演説と裏腹に、対ソ外交や戦後のドイツ・ヨーロッパの復興政策など、どれをみてもFDRのそれとは真逆の方向へと突っ走って行くのであった。

就任演説は、その場しのぎの世論に向けて作った小細工

者で、前身が凄腕の弁護士や大企業の経営者、ベテランの連邦議会議員や州知事経験者、軍人の大物といった今までのタイプの大統領とは、彼はまるで違っていた。

トルーマンは、ミズーリの片田舎から出てきた素朴な正直者に見えるのであった。そして、広い知識や豊かな経験を振りかざしたり、権謀術数を使ったりする連中とは違って、率直で大衆に分かり易い好感のもてる人柄に見えた。西部劇から抜け出てきた昔ながらの正義の男を彷彿とさせる。反面、閣僚や官僚たちは、初めて見るタイプの大統領にいと不安を抱いたのも当然であった。

実際、ステイムソンは、FDRが死去した直後の閣僚会議でのトルーマンの言動を日記に書き留めている。

「新大統領は、FDRから引き継いだはずの職務についてほとんど何も知らなかった。細かい問題でさえも、決断を迫られると、自分にはそんな力はないとも言おうように動揺していた」

だが、それからしばらくして、トルーマンは次々と押し寄せる難題に、見事とも言えるような決断力を見せ始めた。即断即決できびきびと対処した。これには周囲も驚いて、「結構やるな……」と感心する者さえいた。豪胆で、あれやこれやと迷うこともなく物事を即決する姿を見せ、時には周りの者たちからそのスピードをありがたがられた。長い間、FDRの時間を掛けた「ああでもない、こうでもない

であった。ただ、この手の話は、どこの国の政界や経済界でもトップ交代劇でまま見られる。驚くには当たらない。

ところで、バーンズは新大統領をサポートする活動が目立たないようにと、得意の隠密行動をとった。スパークンバーグの自宅とワシントンのアパートメントの小さな事務所の間を行き来して、その年の七月、國務長官に就任するまで、個人的な顧問の立場で大統領の頭脳となった。

その間の彼の秘密主義は極みに達していた。國務長官の椅子が転がり込むまでは、邪魔が入らないようにと気配りしている。ホワイトハウスを頻繁に訪れて大統領と面談を重ねていたにもかかわらず、義務づけられていた入出門記帳もしないし、面談記録も一切取らなかった。その間、二人は重要な情報交換や政策決定をしていたが、すべてを闇の中に仕舞い込んでいた。さすが、サウスカロライナのウルフだ。獲物を口にするまでは用心を重ねる。

その頃、日本への無条件降伏要求、原爆使用の決断、巨頭会議の延期、FDRの対ソ外交やドイツ政策の方向転換など、最重要政策のほとんどをバーンズが決め、トルーマンに助言と言うより、指図していた。

### 19 トルーマンの両極生

#### ●素朴な正直者

トルーマンの性格を見ると、誰もがまず気づくのは、率直さと素朴さであろう。確かに、一流の大学を卒業した

い、の熟慮に辟易していた側近たちの目には、新鮮に映った。それは、まさにルーズベルトとは対極にある振舞いであった。

#### ●アンビバレンスの男

ところが、著名な心理学者で、「アメリカの中のヒロシマ」の著者でもあるロバート・J・リプトンは、トルーマン政権時のヘンリー・ウォレス元商務長官の皮肉な言葉を引いている。

「トルーマンは、考える前に決断することにご執心のようだ」と、手厳しい。

男らしさを求め、迷いのなさを印象づけるためにトルーマンは、見せかけの決断力を披露していた。人前で躊躇いやしり込みの姿を見せたくない彼の大胆な決断は、弱気の裏返しであった。トルーマンの座右の銘、「Buck stops here」(ボーカー用語で、「牡鹿の角は、ここに置け」と、宣言すること)は「責任は引き受けた」という意味だが、それは弱みのカムフラージュであった。

彼は、面と向かって話している人に嫌な顔をすることができなかつた。だから、素早い「イエス」のシグナルを出してしまふ。そして、しばらくして何事も無かつたかのようになり、平然として、無責任にも「ノー」に置き換えてしまふ。その変化はほとんど無意識であった。

また彼は、口から出まかせの嘘をつくことが多く、他人



を感わせることも度々であった。正直で率直な人柄と言われながら、一方で欺瞞の多い彼の言動は矛盾しているようだが、そのどちらも彼の性格から出たものであった。

リプトンの言葉を借りれば、「彼は精神的感覺麻痺と人格分裂を同居させる、アンビバレンス（両面価値）であった」となる。

## 20 初めての原爆レクチャー

FDRの死後、新内閣の陸軍長官に引き継ぎ任命されたステイムソンは、新大統領に原爆のことをどう切り出したらいいか、迷っていた。マンハッタン計画の最高統括責任者であつてみれば、当然、報告しなければならぬ立場にあつたが……。

それはステイムソンの内部にはそのことを切り出すのに心理的な壁があつたからだった。

半年前トルーマンとステイムソンにはまったく逆の立場での確執があつた。トルーマンが上院議員だつた当時、トルーマン議員は、「軍事費の不正使用に関する特別調査報告委員会」の委員長として、軍事費支出の妥当性を監視する役を担つていた。そのとき、巨費を使つているマンハッタン計画に目を付け、陸軍省に対し調査を始めた。四四年三月、委員長はまず、関連のハンフォード工場に着目した。（※ワシントン州ハンフォード・エンジニア・ワークスで、四三年から原子炉でプルトニウムの生産が大規模に行なわ

れていた）

トルーマンから直接、調査協力要請の書簡を受け取つたステイムソンは、初対面の彼に会つて、「国家の命運を左右する機密プロジェクトが進行中です。お察しください」を理由に調査を拒否した。トルーマンはその言葉を聞いて引き下がつたのだつた。

そのトルーマンがあるうことか大統領になつた。それに、トルーマンと仲の良いバーンズは、かねてから原爆開発に疑念を持つていたこともステイムソンは知つていた。もしこれに「莫大な浪費」とでも言われて反対された場合、今までの苦勞は水の泡になる可能性もあつた。ステイムソン長官が報告を躊躇するのも無理はなかつた。そして、もう一つ、原爆というとうほうもない超爆弾を短時間で説明して理解し信用してもらへるかどうか、不安もあつた。

しかしマンハッタン計画の責任者として、大統領への報告は早急にやらなければならないことだつた。ルーズベルトの死から二週間後の四月二四日、ステイムソンは、新大統領にきわめて重要な計画——マンハッタン計画について報告したいと申し出て、至急、時間を取つてほしい旨のメモを渡した。「原爆が、外交関係、とりわけドイツ敗退後のヨーロッパの処理を巡るロシアとの交渉に多大な影響を与えるので、ぜひとも大統領のご理解が望ましい」との趣旨であつた。

トルーマンは、さつそく時間を制くことにした。

## ●新大統領、原爆レクチャーを受ける

四月二五日、新大統領は、マンハッタン計画の全貌についてステイムソン長官とグローブズ將軍から報告を受けた。

その内容は、原爆の威力、国内政治、国際社会と外交への影響、他国の開発状況、そして、今後の開発スケジュールと実用化の見通しなど、多岐にわたつていた。

ステイムソン長官は、開発に至つた経緯を述べた後、次のように核兵器の未来における懸念を説明した。

「われわれは、一発で大都市全体を破壊できる人類史上未曾有の恐るべき兵器を、多分、四ヶ月以内に手に入れることになるでしょう。それは、数百機の戦略爆撃機が数日掛けて遂行する攻撃を、一発で一瞬のうちにやつてのける驚くべき破壊力を持っています。」

この兵器についての断片的知識は、すでに数か国の科学者の間では広く知られています。ですが、実用に向けた一貫した製造プロセスを知っている者は、われわれ以外にいません。当分、わが国と英国が製造ノウハウと原料を独占的に持つこととなります。

とはいえ、先々、ありふれた原料を使った簡単に低コストの製造方法が開発されるでしょう。その結果、将来は小さな国でも短期間に造れるようになります。そうなれば、やがて勝手気ままな国が、原爆を秘密裏に作り、強大に見

えるが無用心な大國に対し、突然これを使用して壊滅的な打撃を与えることにもなりかねません。この新兵器の威力を借りれば、強大な國でも、小さな國によつてわずか数日のうちに征服されることも起こりうるのです。

ただ、今後数年以内に製造できるようになる國は、多分ロシアだけでしょう。なお、われわれが恐れていたナチス・ドイツは実用化までは達していませんでした。

「いや、実に恐ろしい話ですね。マンハッタン計画がそんな新兵器を開発しているとは驚きました。やはり、われわれの後を追つてくるのはロシアですか。絶対に負けられませんか」

トルーマンは驚きの表情を隠さず、興奮のあまり声高に感想を述べた。そして、政界の大先輩に敬意を表しながら、丁重な言葉使いで陸軍長官に尋ねた。

「日本に対して、使用することになりますか？」

ステイムソンは答えた。

「四三年、ルーズベルト大統領には、ブッシュ博士らから、ドイツではなく日本への使用を勧められました。ですが、日本は既に壊滅的な打撃を受けていますから、降伏させるため、ただちに使用する必要はないと思います。新兵器を脅しにして降伏を迫れば効果的です。この件は別途、お話しさせていただきます。」

大統領は、質問を投げた。

「ドイツとの戦いは決着がついているので問題はありませんが、この新兵器はロシアに対して一体どんな影響を与えますか？ それが一番気に懸かる点です」

これに対し、長官は得たりとばかり答えた。「的を射た鋭い質問です。さすが大統領閣下です。」

ヤルタ会談の場で、スターリンは身勝手な野心をあからさまにしたと伝え聞き、私はかねてからその結果に懸念を抱いています。また、閣下も、モスクワ駐在大使のハリマン氏からすでにお聞き及びと思いますが、わが国からの武器や物資の援助をいいことに彼らは強欲を突っ張っていて、目に余る状況のようです。

加えて、ヨーロッパはもちろん、中東、アジアやアフリカにも領地拡大を狙っています。そうした地域への共産主義の蔓延ともなれば、われわれにとつて大きな脅威です。

ですから、ドイツが完全に敗北した暁には、FDRが熱望されていたような友好的な米ソ関係は恐らく望めなくなるでしょう。共産主義がナチスに取つて代わり、ソビエトが、われわれの新たな敵になるのは必定です」

大統領は言った。

「確かに、ドイツが片付いたと思つたら、今度は、ロシアがわれわれの敵になりかねません。まあ、すぐにも戦争になるとは思いませんが、対立関係になるでしょうね……」

これにに応じて、長官は説明した。

意見を述べていましたので、ますます心強く思っています」と、大統領は喜んだ。

ステイムソンは、「バーンズ氏も同じような意見を述べていた」との大統領の発言がちよつと気にはなつたものの、そのまま、視点を変えた話を始めた。

「懸念していることがあります。この新兵器の科学技術の発達に比べて、倫理の観点から見た思考の遅れがあるという点です。近い将来これが世界に拡散すると、究極的には人類は核兵器に振り回されたり、現代文明が完全に破壊されてしまうこともありうるのです。」

ですから最初にこの新兵器を手に入れた国として、わが国は先頭に立って、世界規模の平和機構によって、この兵器の国際管理と徹底した査察体制を作り上げる責務があると考えます。

また、他の諸国に対しこの兵器を共有させるかどうかは外交上の大きな問題となるでしょう。

加えて、わが国がもし安易な使用に走れば、この兵器がもたらす文明破壊について合衆国は重大な道義的責任を問われ、非難を受けることになるでしょう。

一方、仮に、これを適切に管理する方法が見いだせるとすれば、原爆が抑止力として、世界の平和と文明を救える好機が得られることになるでしょう」

陸軍長官は理論だつてあれこれと込み入つた話をしたが、

「わが国が彼らと戦争をしないまでも、この新兵器は、戦後ヨーロッパを巡るロシアとの外交上、極めて効果的な交渉の決め手になるでしょう。今後の交渉は、われわれにとつて有利になるでしょう。」

FDRがわが国の弱みとお考えになっていた軍事面においても、最早、赤軍に引け目を感じる必要はありません。例えば、戦後のドイツをはじめヨーロッパの安全保障のために必要な駐留米軍の規模も、原爆のお蔭で相当圧縮できるでしょう。ですから、ロシアに対し、必要以上の譲歩や遠慮はすべきではありません」

大統領は、続けて尋ねた。

「では、太平洋戦争への影響は、どうなりますか？」

長官は、得意そうに即答した。

「対日戦でも、原爆の威力で日本を脅し、降伏させることができるでしょう。そうなれば、赤軍の応援は不要となります。ですから、極東でもわれわれが軍事、政治の両面でリーダーシップを握ることができます。原子力兵器は使用しなくても、抑止力が有効に働きます。核兵器のとつてもない威力をぜひともご理解ください」

「長官のご見解は、私に勇気を与えてくれました。これから先のスターリンとの厳しい交渉に、光明が差ししてきたように思います。」

先だつて、バーンズ氏も原爆について貴方と同じような

大統領はすべてを頭の中で消化することはできなかったようだ。

ついでグローブズ將軍は、原爆の爆発の原理と破壊力の規模、原料の生産地とその取得と管理、そして実験不要のウラン型および実験要のプルトニウム型爆弾のそれぞれの開発・実験と完成の予定、使用可能時期など説明した。彼は、原爆の売り込みに懸命であった。

終わりに、長官から、新たにマンハッタン計画に関連する委員会設置の提案があつた。このプロジェクトに関与している各部門の代表者、軍の首脳、そして科学者らによる委員で構成し、委員会は大統領への勧告を任務とすることにあつた。

当計画の実験と完成の時期が近づくにつれ、関係者の意思統一は重要である。五月初旬、さつそく陸軍長官らは暫定委員会と名付けられた委員会の発足に向けて準備に入つた。

●バーンズ、先駆ける―原爆至上主義者へ変身―

話を戻して、ステイムソンの大統領への原爆レクチャーの場で、トルーマンが「バーンズ氏も、原爆について同じような意見を持っていた」と発言している。それは、一体何を意味していたのであろうか。

実は、ステイムソンとグローブズの二五日の報告に先駆けて、すでにFDRの死去から二日後の四月一四日、バー

ンズが大統領に原爆の解説をしていたのだ。それは簡潔ではあったが、二人の報告によく似た内容であった。

トルーマンの回顧録「決断の年」には明確に、そのことが次のように書き留められている。

「ステイムソンは、『原爆がもたらすであろう、戦争の革命的な変革と、文明への効果について、彼の見解をせむとも理解し、共有して頂きたいと説明した。……彼は、原爆は、他国との関係において間違いなく決定的な影響力を持つであろうと述べた。そして、この爆弾が作動したら、きつと、戦争は早期に終結するであろう』と。

ところが、バーンズは、すでに「ステイムソンらの報告以前に」私に以下のことを話してくれていた。

「この兵器は、前例のないスケールで、都市を丸ごと破壊してしまうであろう。そしてそれは、戦争が終わった後に、われわれの思い通りの条件を相手（ロシア）に要求できる立場に立てる」と、彼は確信をもって述べた。

ルーズベルトの生前、バーンズが原爆のことをどう考えていたのか、振り返ってみよう。先に触れたように、彼は、原爆の実用化には疑問を持っていて、「その開発は、20億ドルのムダ使い」と否定的な意見であり、四五年初、大統領に警告していた。バーンズからマンハッタン計画への疑念を聞いたFDRは、ステイムソンに「開発の現実性について反論があれば、聞かせて欲しい」と、尋ねている。

何事につけ、慎重なマーシャル参謀総長に頼るのも難しい。また、ステイムソン陸軍長官に頼るとしても、彼は七七歳と高齢で病弱だ。はたして新内閣の閣僚として残って、先々、マンハッタンを擁護してくれる保証もない。加えて、陸軍長官が反マンハッタン計画の急先鋒であるトルーマンやバーンズと良好な関係とは思えない。

その二人が新体制の中心軸となるのに違いないから、ほっておくと、開発や使用の中止も十分ありうると恐れられた。行動的なグローブズは、FDRの死去の翌日には動き始めた。やり手のバーンズに売り込むのが早道と気づいた。だが、彼とは懸念ではない。そこで、まず、自分を総括責任者にとFDRに推挙してくれたバルークに口を利いてもらうことにした。バルークは、バーンズとも親しいし、原爆をビジネスのネタにしている原爆を止められたら困る立場だ。グローブズの読みは的中し、バーンズ説得の橋渡し役を、二つ返事で引き受けてくれた。

さっそくグローブズは、新大統領に近々提出しようとする準備していたステイムソンと自分の原爆に関する覚書の草案を、密かにバーンズに渡した。

一方、バーンズは、トルーマンから外交のすべてを任せられることになって、今後の使命は國務長官としての任務である。その最大の課題が戦後のヨーロッパを巡るソビエトとの外交交渉だと考えていた。

陸軍長官は、三月、さっそく、これに感じ、原爆の実用化の可能性とその効用について詳細なレポートを提出し、大統領の納得と安心を得ている。

ところが、FDRの死の直後、トルーマンに請われて外交について全面的に頼られることになったバーンズは、不可解にも、突然、原爆への関心を肯定的な方向に変えさせ、新大統領に原爆の事を説明しているのだ。その内容は、ステイムソンの四月二十五日のレクチャーの荒筋とそっくりであった。一体、なぜそんなことになったのであるのか？

このことを歴史家メッサーは、「バーンズは原爆の情報を盗み取って、先手を取って、トルーマンにレクチャーした」と言っている。

だが、本当のところは、「盗み取った」のではなく、グローブズがバーンズへ原爆の情報を提供したためと推理するのが妥当であろう。バーンズは、彼からの働き掛けによって、原爆への積極姿勢に転じたのだ。マンハッタン計画の総括責任者グローブズは、実験を成功させ、必ず実戦で使いたいとする数少ない原爆信者であった。

そのグローブズは、ルーズベルトの死の直後、政権交代に直面して、原爆のこれからの行く末がにわかには気掛かりになってきた。政治の最高責任者が変わると、得てして方針転換するのが世の常だ。この計画が自分の思いと異なる方向へ向かってしまうのではないかと、彼は危惧した。

その矢先に、「原爆が、外交の決め手になる」とのステイムソンの見解を、図らずもグローブズから手渡された資料によって知った。そして、たちまち、原爆の威力を持って、ロシアをして御しやすくする」を自論にしまった。それは、原爆の政治的文脈についての価値評価であった。原爆は、バーンズにとつて、まさに渡りに船であった。そして、ステイムソンに先駆けて、トルーマンに売り込んだというわけだ。

さて、五月初旬、ステイムソンの肝いりで原爆の問題を討議するための暫定委員会が発足した。そして、バーンズは大統領の個人的代理人としてその委員会のメンバーになると、正面玄関から原爆に近づくことができるようになる。彼は原爆の友人よろしく、たちまちにして主導権を病弱のステイムソンから奪い取った。

そして、バーンズは、その政治性に目をつけ、原爆の批判者から一転して原爆至上主義者に変心したので。

(つづく)